人魚たちの復讐

空さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人魚たちの復讐

【Ｎコード】
Ｎ０７１６Ｘ

【作者名】
空さん

【あらすじ】
あたしはどこにでもいる　中学一年生の女の子　山口美心　あたしが小学生の時に通っていた　人魚水球クラブで事件が起きて…
どうやら幼なじみの　高崎健太くん（呼び名：健ちゃん）もその事件に関わっているらしく…　迷探偵が今…　動き出す！？

プロローグ

開けてはいけない
この扉は

開けてはいけない
絶対に

胸の鼓動が
身体に張り付いた
水着の中で
それをあたしに
伝えようと
している

濡れた髪から
タイルにそっと　一滴

それがまるで
合図かのように

あたしは静かに
扉ノブを回し
気づかれないように

倉庫(そうこ)の中(なか)を
覗(のぞ)き　見(み)た

1. 突然の死

「美心
起きなさい　美心！」

お母さんの声が
　　手が
あたしの鼓膜を
　　身体を
揺さぶる

眠気眼で
ベッドから起き上がってみれば

「おはよう…　と言うか
もうお昼過ぎよ
一体いつまで
寝てるつもり？
中学生になってから
初めての
夏休みでしょ？
しっかりしなさいよ」

お母さんは
そう言ってから

あたしの部屋の
カーテンを
ゆっくりと　開ける

「…おはよう」

あたしが目を擦りながら
まだ半分眠っている
脳ミソで
そんなお母さんの様子を眺めていると

…あれ？
何だか　お母さん
いつもと雰囲気が
違うような…

普段は
お気に入りの
可愛いヒヨコの柄が
入った
エプロン姿の
はずなのに…

今日は　黒…
うん　やっぱり黒は
女を美しく魅せる

って言うからね

お母さん
何の変化か
イメージチェンジ…？

…ぅん？
よく見ると　違う
…あれれ？
お母さん　喪服姿？

少しはっきりしてきた
脳ミソが
活動をＯＮに
切り替える

「お母さん
その格好…
誰か　亡くなったの？」

あたしは布団の中から
抜け出すと
ベッドに腰掛けながら
尋ねる

「そうなのよ…
美心

落ち着いて聞いてね
さっきね
人魚水球クラブの
三枝コーチから
電話があってね
風間コーチが
亡くなったって…」

「えっ！？
風間コーチが…？
なんで？
どうして？」

パニくりそうな自分を
何とか抑え込みながら
あたしはお母さんを
見つめる

お母さんは
そんなあたしの隣に
腰掛けると

「お母さんも
さっき
聞いたばかりでね
あまり詳しくは
ないんだけれど…

どうやら
水球クラブ活動中での
事故死らしいわ」

そう言って
あたしの頭の上に
優しく掌を置くと続ける

「何でも
タイル拾いゲーム？
が　原因とか…
プールの中で
亡くなったらしいわよ」

風間コーチが…
死んだ

若くて爽やか
絵に描いたような
体育会系のイケメン
確か今は
大学の四年生だった
はず…

あたしが水球クラブに
在籍していたときには

保護者からも
他のコーチからも
とても人気があって
信頼もあって
面白くて
明るくて…

…そんな風間コーチが
死んだ…

「それでね　美心
美心はもうお世話には
なっていないと言っても
やっぱりお母さん
手伝いに行こうかと
思って…
健太くんのお母さんと
一緒に
これから風間コーチの
ご自宅に
行って来るわ」

お母さんはそう言うと
あたしの頭の上に
置いていた掌で
あたしの頭を
軽くポンポンと叩くと

「さあ
お母さん出掛けるから
さっさと起きてちょう
だい
ご飯は
一階のテーブルの上に
置いてあるから
温めて食べてね
それとお父さんは
お仕事で出掛けている
から
お留守番しっかり
頼むわよ」

そう言って
部屋を出て行った

あたしは何だか
信じられない気持ちで
風間コーチの
日に焼けた笑顔を
透き通った声を
思い出して　いた

2．探偵誕生？

あたしが普段着に
着替えて
一階に降りて行くと
リビングのテーブルの上には
ラップのかかった
オムライスと
温野菜のサラダが
置いてあった

こんなときに
食欲なんて
湧かないよ…
とは言いたいけれど
やっぱりそこは
中学一年生だし
食べ盛りだし…

何だか変な言い訳を
自分自身にしながら
あたしはラップのかかった
オムライスを
電子レンジに入れて
温め始める

その間に
冷蔵庫から
牛乳を取り出して
コップに注いで
ついでにドレッシングを
温野菜のサラダに
かける

ちょうど
温め終わったオムライスを
電子レンジから
取り出して
椅子に座ると
一人モクモクと
食事を始めた

…うん！
やっぱり
お母さんのオムライスって
美味しい！

単純にそんなことに
感激しながら

でも
満腹中枢が
少しずつ満たされてくると

いつの間にか
あたしの気持ちは
必然的に
風間コーチのことで
いっぱいになって
いった…

今から二年前
あたしが
小学五年生のときに
発足した
人魚水球クラブ

風間コーチは
そこの先生の
一人だった

当時はまだ
確か大学二年生で
それでも
小中高大学と
水球一筋な
水球大好き人間

人魚水球クラブを

発足させた
徳川コーチと共に
後進育成のために
学業と両立させながら
一生懸命頑張っていた

まぁ…
水球クラブといっても
あたしを含めて
生徒はたったの
１１人…

しかもその内
女の子は
あたし一人だけだという
弱小初心者クラブだったのだけれど…

あたしは
食べ終わった食器の残骸を
キッチンの流し場まで
運ぶと　洗い始める

ひねった蛇口から
溢れ出る水流が
何となく
プールの水を

思い出させる

正直なところ
あたしは特別
水球自体に
興味があった訳じゃ
なかった…

ただ
幼なじみの
健ちゃんが
水球を始めると
言い出したので
あたしもそれに
くっついて
強引に入部したような
感じだった

家の近所に住んでいて
いつも一緒に遊んでいた
“健ちゃん”こと
高崎健太くん

両親同士が
仲が良かった
ということも

あったのだけれど
それ以外にも

幼稚園
小学校と
ずっと同じクラス
なぜか中一になった今も
同じクラスの　腐れ縁

ここまでくると
幼なじみというか
何というか…

周りの友達からは　よく
“あんた達
　付き合ってんの？”
なんて言われるけれど

決して
そんなんじゃなくて…

友達以上
恋人未満
みたいな…

幼なじみ特有の

独特な関係というか…

…あれ？
あたし何で
こんなこと
考えてるんだろう…？

食器を洗い終えて
濡れた手を
タオルで拭きながら
あたしは首を　傾げる

…そうそう！
あたしは風間コーチの
ことについて
考えていたんだった

健ちゃんと
あたしの関係は
今はどうでも　いい

それにしても…

あたしの脳裏に
ふと疑問が

思い浮かぶ

あんなに水球に
慣れ親しんでいた
風間コーチが
そう簡単に
プールで事故死だなんて
あり得るのだろうか…？

確かに
体調が悪かったり
予期せぬことでの
事故死は
あり得るとは
思うのだけれど…

あたしはキッチンの
流し場の前で一人
腕組みをして考える…

何となく気分は
名（迷？）探偵チックだ

でも
今のところ

いくら考えても
どんな状況での
事故死だったのか
それが分からないと
何とも　言えない…

…！

そうだ！
健ちゃんなら
幼なじみの健ちゃんなら
その状況が
分かるかもしれない！

あたしは
小学校卒業と同時に
人魚水球クラブを
きっぱりと辞めたけれど

健ちゃんは確か
中一になった今でも
コーチ補助みたいに
後輩の
小学生達の育成に
水球クラブへ行くって
言っていたような…

あたしはポケットから
急いで携帯を
取り出すと
健ちゃん宛に
メールを打ち始めた…

3．連絡

ええっと…
あたしはポケットから
携帯を取り出すと
健ちゃん宛に
メールを打ち始める

To：健ちゃん
件名：今何してる？
本文：風間コーチのこと
　　聞いた？

From：美心

送信ボタンを押して
5分もしない内に
健ちゃんから
返信メールが届く

To：美心
件名：Re　今何してる？
本文：今　家
　　聞いたも何も

俺　その場にいた
から

Ｆｒｏｍ：健太

やっぱり…

あたしは一人
携帯に向かって
小さく頷きながら
メールを打ち返す

Ｔｏ：健ちゃん
件名：ＲｅＲｅ　今何して

本文：色々と
大変だった
でしょう？
大丈夫？

Ｆｒｏｍ：美心

同じように
５分もしない内に
健ちゃんから
メールが届く

To：美心
件名：ReReRe　今何して
本文：大丈夫
美心のお父さん
から
少し事情
聞かれたくらい
From：健太

そっか…
うちのお父さん　今日
仕事だって
お母さん言ってたもんね

…でも
お父さんが
風間コーチの件に
関わっている
ということは
風間コーチは
事故死じゃない可能性が
あるってこと？

あたしは少しの間

腕組みをして
考え込んでから
再びメールを
打ち返す

To：健ちゃん
件名：ReReReRe　今何し
本文：変なこと聞いて
　　ごめんね
　　風間コーチ
　　事故死じゃないの？

From：美心

今度は少しだけ
健ちゃんから
メールが届くのに
時間が　掛かった

To：美心
件名：ReReReRe　今何
本文：いや
　　事故死だって
　　美心のお父さんは

言ってたけど
美心　今　家？

From：健太

このメールを受け取って
何となく
あたしは心のどこかで
ホッとしていた
そして再び
メールを打ち返す

To：健ちゃん
件名：ReReReReReRe　今
本文：うん
　今　家にいるよ

From：美心

するとすぐに
健ちゃんから
返信が来る

To：美心
件名：ReReReReReReRe

本文：今から
そっち行っても
いいか？
メールよりも
色々と話せると
思うから

From：健太

確かに
直接会って
話すほうがいいかも…

あたしは一人
携帯に向かって頷くと
メールを打ち返す

To：健ちゃん
件名：ReReReReRe…

本文：分かった
待ってるね

From：美心

このメールを

打ち返してから
15分もしない内に
健ちゃんは
あたしの家にやって来た

まぁ…
歩けば5分とも
掛からない
ご近所さんなんだけれど…

玄関のチャイムが鳴って
出迎えたあたしに

プールの塩素で
少し茶色くなった髪と

太陽からの紫外線で
日焼けした顔の
健ちゃんは

「よっ！」

そう一言　挨拶してから
いつものように
屈託のない顔で
微笑んだ

4．幼なじみ

あたしは健ちゃんを
リビングに通すと

「オレンジジュースで
いい？」

そう言いながら
自分はキッチンにある
冷蔵庫へ向かう

健ちゃんは
リビングの椅子に
腰掛けながら

「この猛暑の中
歩いて来たんだぜ？
氷入りカルピスで
よろしく！」

なんて言う

猛暑の中
歩いて来たって言うけど
健ちゃんの家と
あたしの家

片道5分も
掛かんないじゃない…
本当にもう！
…なんて思いつつも

あたしは

「はいはい」

そう言いながら
冷蔵庫から
ミネラルウォーターと
カルピスの原液を
取り出すと
カルピスを作り始める

そんなあたしに向かって
健ちゃんは

「“はい”は1回！だろ？」

なんて偉そうに
言ってくる

あたしは冷蔵庫から
氷を取り出して
カルピスの入った

コップに
いくつか入れると
それをお盆に載せて
健ちゃんが待つ
リビングのテーブルへ…

健ちゃんの座っている
テーブルの前に
氷入りカルピスを
トンッ！と置くと

「はい！」

と言ってから
健ちゃんを
少し　睨んだ

そんなあたしを見て
健ちゃんは

「か、軽いジョークじゃ
ねぇか
こんなことで
怒んなよ…」

と少し　ビクついている

あたしは何だか
心が暖かくなって
「軽いジョークじゃない」
そう言い返して
微笑んだ

そしてあたしは
健ちゃんの正面の椅子に
腰掛けると

「…それで
風間コーチのこと
なんだけれど…」
話題を切替えるように
言う

健ちゃんは
飲んでいたカルピスの
コップを
テーブルの上に
置いてから

「うん…
山口にも以前

少しだけ　話したかも
しれないけど
俺さ
小学校を卒業しても
たまに水球クラブに
コーチ補助として
手伝いに行ってたんだ
今日の午前中も
そうだったんだけど…
山口　覚えてる？
タイル取りゲームの
こと」

中学に入ってから
健ちゃんは
あたしのことを
声に出しては
“み～ちゃん”とも
“美心”とも
呼ばなくなっていた

そして気がつけば
あたしのことを
苗字の“山口”と
呼ぶようになっていて…

そしてあたしも

気がつけば
健ちゃんのことを
二人以外のときと
親しい人の前以外では
“高山くん”
と呼ぶように
なって　いた

「タイル取りゲーム…
確か
プールの底に落ちてる
色付きのタイルを拾う
ゲームのことだよね？」
あたしがそう言うと
健ちゃんは頷きながら
「そう　それ
それを風間コーチと
生徒のみんなで
一緒にやってて
その最中に
コーチが溺れて…」
健ちゃんはここで
一呼吸置くと

「…そのまま
亡(な)くなったんだ…」

そう言(い)ってから
あたしを
真(ま)っ直(す)ぐに　見(み)た

5．刑事の娘

健ちゃんの瞳の中に
あたしが映っている…

あたしは何故だか
この瞬間
このままこのことを
何も知らないほうが
いいような気がして

思わずフッ…と
その瞳の中から
飛び出すように
視線を　逸らした

それでも
父親譲りのＤＮＡが
心の中のどこかで

あたし自身が
納得するまで

知るべきなんだと
見るべきなんだと

確かに
静かに
蠢いて　いる…

あたしは
健ちゃんの瞳を
見つめ返すと

「…そう
風間コーチのこと
その場にいたのなら
かなりのショック
だったよね…
…あと
うちのお父さんの
ことも
大丈夫だった？
失礼なこと
言わなかった？」

あたしがそう尋ねると
健ちゃんは頷いて

「ああ
俺は全然　大丈夫
風間コーチには
悪いけど
まぁ　しょうがない

って言うか…
山口の父さんのことも
プールの横にある
事務室で
みんな順番に
簡単に事情を
聞かれただけだから」

健ちゃんはここで
両手を組んで
頭の後ろに添えると
軽く天井を
見上げるように

「でもやっぱ
山口の父さんって
普段はそんな風には
思わなかったけど
刑事なんだな
って感じたし
思ったよ…」

そう言って
微笑んだ

その微笑みに
あたしも釣られて

一緒に微笑むと

「…うん
なら良かった
何だか　ごめんね
色々と変なこと
聞いちゃって…」

そう小さく言った

健ちゃんは
そんなあたしを見て
わざと大袈裟な口調で

「何言ってんだよ！
幼なじみの
愛しい俺様ことを
心配してくれたん
だろ？」

悪戯っぽくそう言う

やかんの中のお水が
一瞬で沸騰するような
感じ…

両頬の紅い熱を
誤魔化すように

「そうそう　腐れ縁で
長い付き合いの
幼なじみのことを
仕方なしに
心配してやったのよ！」

あたしはそう言い返して
健ちゃんと二人して
声を出して　笑った

そして
その笑い声が
治まった　瞬間…

「…山口
あのさ…
実は俺…」

突然の
トーンダウンと共に
健ちゃんの真剣な
眼差しが
あたしの瞳を　捉える

「…うん？」

あたしは
そう音を発するのが
精一杯のことで
まるで何かの魔法に
掛かったかのように

健ちゃんのその真剣な
眼差しを見つめ続けて
次の言葉を
待って　いた

…そして
次の　瞬間…

健ちゃんが
口を開こうとしたのと
同時に

「ただいま～！」

玄関から聞こえてくる
お父さんの　声…

今度は
掛かっていた魔法が
解けたかのように
あたしと健ちゃんは
二人して肩で
小さく息を吐くと
リビングに入って来た
お父さんのことを
見つめた

「おかえりなさい」

あたしと健ちゃんの声が
シンクロするように
音を出す

お父さんは
そんなあたしと
健ちゃんの顔を
交互に見つめると
健ちゃんのほうに
目をやって

「おう！健ちゃん！
来てたのかい？
今日は
大変だったろう？

でも心配することは
ないよ
あれは事故だからね
しょうがない！」

そう陽気に
健ちゃんに声を掛ける

「…はい」

健ちゃんは
それに応じるように
返事をしながら頷くと
あたしのほうを見てから

「…じゃあ俺
そろそろ帰らないと…」

そう言って　席を立つ

「…えっ？
あっ…うん…」

あたしは何だか
そんな健ちゃんを
引き留めることが
出来ずに

お父さんに
小さく会釈をして
リビングを出て行く
健ちゃんの後ろ姿を
その背中を
見つめて　いた

健ちゃんの
そんな姿を
見つめながら
あたしは不思議と
こんなことを
思っていた

あたしは
刑事の娘だけれど
刑事という職業が
あまり好きじゃない

こんなことを言うと
お父さんには悪いけど…
だって
人を疑うことを
仕事にしているだなんて
そんな職業
絶対に　嫌…！

それは絶対に
嫌なんだけれど…

…でも
あたしにも
確実に
そんな刑事の
お父さんの
DNAが
組み込まれて　いる…

そして
健ちゃんがさっき
真剣な眼差しで
あたしに言いかけた
伝えたかったことを
考えると…

心の中に
モヤモヤとした
灰色の雲が現れて
それをドンドンと
増幅させて　いく…

“…健ちゃんは

何か重要なことを
あたしに隠して
いる…”

娘のそんな気持ちを
知ってか
知らずか

お父さんは
背広の上着を脱いで
リビングの椅子の
背もたれに
それを掛けると
ネクタイを緩めながら

「おっ！
カルピスか
外は暑くて堪らんよ！」

そう言って
健ちゃんの飲みかけの
カルピスを
一気にグイッと
飲み干した

6．お葬式の午後に

…健ちゃんは
何を隠して
いるんだろう…

“…山口
あのさ…
実は俺…”

あの言葉の後に
健ちゃんがあたしに
伝えたかった言葉は
一体何だったの
だろう…？

そんな釈然としない
気持ちを
抱え込んだまま

健ちゃんが帰った日の
翌日の午後
あたしは自分の部屋の
ベッドの上で
横になりながら
ゴロゴロと　していた

ふと
ベッドの横の
台の上に置いてある
目覚まし時計を見れば
もう午後の１４時…

きっと今頃
風間コーチのお葬式が
執り行われて
いるはず…

昨日　喪服姿で
風間コーチの
アパートへ
お手伝いに向かった
お母さんは
そこで
お手伝いをしながら
そのまま
お通夜にも出席し
結構
夜遅くになってから
帰って来た

そして今日もまた
喪服に着替えると

風間コーチの
お葬式へと
出掛けて行った

あたしも
行ったほうが
いいのかと
お母さんに
尋ねたのだけれど

どうやら
水球クラブ内での
話し合いの結果
卒業生にも
連絡網が来て
現リーダーの
男の子が一人
水球クラブの
生徒代表で
出席するということが
決まったらしく

他の生徒達は誰も
行かなくても
いいということに
なった　と
お母さんは

話してくれた

お父さんはお父さんで
別の事件の仕事が
入ったらしく
あたしが起きたときにはもう
家にはいなかった

また一人で
お留守番…
お菓子でも
食べようかな…

どんなに釈然としない
気持ちでいても
やっぱり　そこは
中一の女の子
スィーツに
勝るものなんて…
多分　ない

…確か
冷蔵庫の中に
取って置きのプリンが
1個だけ
あったはず…

あたしは少し
ウキウキしながら
ベッドから
飛び起きると
二階の自分の部屋から
階下のリビングへと
向かう

…そのとき

“ピンポーン”

玄関のチャイムが鳴る

階段を
降りかけていた
あたしは

「は〜い」

と返事をしながら
急いで階段を降りて
玄関へと向かい

鍵を開けると

ゆっくりと
扉(ドア)を　開(ひら)いた

7．来訪者

玄関の扉を
開いた先に
待っていたのは…

「久しぶり
連絡もしないで
いきなり来ちゃって
ごめん
どう？夏休み
満喫してる？」

同じ中一の同学年で
元人魚水球クラブの
仲間の内の一人
桂木修平くん　だった

「桂木くん！？
久しぶり！
どうしたの？
まぁ　入って」

あたしは少し
驚きながらも
桂木くんを
招き入れながら

そう言う

桂木くんは

「じゃあ…
お邪魔します」

そう言いながら
靴を脱いで
それをしっかりと
揃えると

「風間コーチのこと…
連絡網が来て…」

声のトーンが
暗くなる

「…うん
突然のことで
びっくりしたよね…」

そう言いながら
二人一緒に
リビングへと向かうと

あたしは桂木くんに
椅子を勧め

自分は
飲み物を入れるために
キッチンへと向かう

「オレンジジュースで
いい？」

あたしがリビングの
桂木くんに
声を掛けると

「あ…
お構いなく」

そんな桂木くんの声が
返ってくる

他の飲み物を
氷入りで頼む
誰かさんとは
大違い過ぎる…

あたしはお盆に
オレンジジュースの
コップを
二つ載せると

リビングへと向かう

「はい　どうぞ」

オレンジジュースを
桂木くんの前に置く

「ありがとう
いただきます」

桂木くんはそう言って
微笑むと
オレンジジュースを
一口飲んだ

「中学校のほうは
どう？」

あたしが
桂木くんの
正面の椅子に
腰掛けながら
尋ねると

「うん…
まぁ…普通…かな？
でも正直言うと

健太や美心ちゃんと
一緒の中学校が
良かったかなぁ…
って」

桂木くんは
そう言ってから
また微笑む

ほんわりとした
雰囲気で
誰にでも優しい
誰からも好かれる
桂木くんは
小学校は
あたしと健ちゃんと
同じだったのだけれど

中学校からは
私立の
お坊ちゃま学校の
受験に合格して
あたしと健ちゃんとは
別の学校へと
通っていた

「会うのは

小学校を
卒業して以来
かもね」

あたしがそう言うと

「うん…
本当にごめん
突然来ちゃって
でもどうしても
風間コーチのことが
気になったから…
美心ちゃんの
お父さんは確か
刑事さんだったと
思って
何か知ってるのか
なぁ…って」

桂木くんは
申し訳なさそうに
言う

「ううん
全然大丈夫！
あたしは夏休みで
ゴロゴロしてた
だけだし

一人きりで
お留守番で
丁度　話し相手も
欲しかったところ
だし！」

せっかく
来てくれたのに
申し訳なさそうに
している
桂木くんを見て
何だかあたしのほうが
申し訳なくなってきて
必死になって
そう言いながら
あたしは続ける

「あたしも
そんなに詳しくは
ないんだけど
桂木くん
ほら覚えてる？
プールに
慣れるために
たまにみんなで
やった
タイル取りゲームの
こと」

「あっ…うん
プールの底にある
色付きのタイルを
潜って取って来る
ゲームだよね？」

「そうそう
どうやら
風間コーチは
そのゲームを
している最中に
溺れて
亡くなったそうよ
お父さんは
事故死だ…って」

「そう…なんだ…」
桂木くんは
あたしの話しを
何か考え込むように
聞いていると

「健太も
その場にいたの？」

次の瞬間
そう　言った

「…えっ？
あっ…うん」

あたしは頷きながら

「健ちゃんは
小学校を
卒業した後も
コーチ補助みたいな
感じで
水球クラブを
手伝いに行っていた
から…」

そう応えると

「そっか…」

桂木くんは
思い詰めたように
頷くと

「自業自得…なんだ…

健太に
感謝しなきゃ…」
そう　呟いた

「…えっ？」
あたしが驚いて
思わず声を出すと

桂木くんは
いつもの優しい
雰囲気に戻って

「ううん…
何でも　ない」
そう言って
微笑んだ

8．懇願

“自業自得って
どういうこと？
健ちゃんに感謝って
一体何を？”

あたしがそう
口を開こうとしたとき

「それにしても
美心ちゃん
雰囲気　変わったね
水球クラブに
いたときには
ショートカットで
まるで男の子みたい
だったのに

中一になった今では
髪も
肩まで伸ばして
ちゃんと
女の子してるよ」

桂木くんがそう言って
微笑む

「そっ　そうかな…」
あたしは少し
照れながら
頭を　掻く

確かにあたしは
小学生のときには
髪も短くて
ボーイッシュだった

…まぁ
外見だけじゃなくて…

悪ふざけをする
健ちゃんを
追い回したり
取っ捕まえて
制裁を加えたり
一緒になって
泥んこ遊びをしたり
木に登って
遠くの景色を
眺めたり…

ある意味　本当に
男の子っぽかったの
だけれど…

中一になった今は
ちゃんと自分を
自覚？して
一応？は
女の子っぽくしてる？
から
問題はない…はず…

？マークが
多くなるのが
ちょっと引っ掛かる
けれど…

…うん！

“終わり良ければ
　すべて良し”

よ！

…あれ？

何だか使い方が
間違っているような…

…でも

気にしない…
うん！　気にしない！

あたしがそう一人
変な風に
納得をしていると

「美心ちゃんは
風間コーチが
亡くなって
…どう思った？」

ふいに
優しい微笑みの消えた
桂木くんが
真剣な表情で
聞いて　きた

「…うん？」

桂木くんの
あまりに真剣な表情に

一瞬　返答に困った
あたしだけど

それでも
口を開けば

「何だか
変な感じ…かな
知ってる人が
この世から
いなくなる…
っていうか
もう会えないん
だな…って…
でも正直
まだ信じられない
感じで
現実味がなくて…」

あたしがそう応えると
桂木くんは
真剣な表情のまま
その言葉を聞いていて
そして　ふと

「…僕は

気持ちが
すっきりした
感じ…かな？
…過去の呪縛から
解き放たれた
みたいに…
心が自由に
なったような…」
そう　呟いた

「…えっ？」
あたしが驚いて
そんな桂木くんを
見つめると

桂木くんは
見たこともないような
寂しそうな顔で
微笑んだ

…桂木くんは
あたしに
何かを伝えようと
している…？

さっきの言葉…
そして
今の　言葉…

きっとそれは
風間コーチの死に
関係していることで
とても言い難い…こと

…そして
そのことに
健ちゃんも関わって
いるかもしれない
ということ…

このまま何も
聞かないほうが…

…心が
ざわつき始める…

…それでも
あたしは知りたい
知らなくてはいけない

そんな気が　する

このままここで
口を閉ざして
しまったら
目を瞑って
しまったら
いけないような
気がする
後で後悔するような
気がする…

そんなのは絶対に
嫌だ

あたしは心を決めて
小さく息を吸い込むと

「ねぇ…桂木くん
あたしに
話したいことが
あるのなら
話してみて
あたし　絶対に
誰にも言わない
もちろん
お父さんにも

もし今回の
風間コーチのことが
事故死じゃなくても

もしそのことに
誰かが…
…健ちゃんが
関わっていたと
しても
絶対に
誰にも
言わないから…

ただ…
どんなに
辛いことでも
本当のことが
知りたいの」

そう一気に言って
桂木くんを
真っ直ぐに　見つめた

9．告白

“どんなに
辛いことでも
本当のことが
知りたい”

あたしはその想いを
真っ直ぐに桂木くんに
ぶつけた

桂木くんは
そんなあたしから
目を逸らすと

「…いや
僕は…別に…」

そう歯切れ悪く
応える

でも
心を決めたあたしは
ただ
そんな桂木くんを
見つめ

次の言葉を
待つことしか
出来なかった

…
……
……

沈黙の時間が　流れる

あたしには
その時間が
もの凄く長く
感じられたのだけれど
きっと5分も
経っていなかったと
思う

「…独り言」

目を逸らしたまま
桂木くんがふいに
そう　言葉を発した

「今から
僕が言うことは

全部…
独り言だから…」

あたしは
何も言わずに
小さく頷いた

桂木くんは
心を決めたように
小さく息を吐き出すと
ポツリポツリと
話し始めた

「あれが…
あれが始まったのは
人魚水球クラブに
入って
半年くらい
経った頃のこと
だったと思う…
丁度
今みたいな
夏休みに入ってから
すぐくらいの頃
そう…小五の…
夏休み…

ほら　覚えてる？
クラブが終わった
後の
器具の後片付け
風間コーチと
生徒の一人がいつも
それをしていた
こと…

そして
その後片付け役の
生徒の一人を
いつも風間コーチが
名指しで
決めていたという
こと…」

桂木くんは
あたしから
目を逸らしたまま
まるで思い出すように
遠くを見つめながら
続ける

「…器具の
後片付けにしては
倉庫の中にいる

時間が
少し長かったよね…
しかも
後片付けをしない
生徒達は
さっさと更衣室に
向かわさせられて…

プールの横の
倉庫の中に残るのは
いつも
風間コーチと
後片付けをする
ように
名指しされた
生徒の一人だけ…」

ハッとして
あたしは桂木くんを
見つめ直した

「…そうだよ
まるで生贄みたいさ
僕達は毎週毎週
代わる代わる
あの倉庫の中で
風間コーチから

ご丁寧に
ご指名を受けて
悪戯されて
いたんだよ…」

驚くほど冷静に
桂木くんは
そう言い切ると
淀みなく真っ直ぐに
あたしを　見た

「そ…
そんなことって…」

動揺しながら
やっと発した
あたしの言葉を
遮るように

「そんなこと
あり得ないって？」

次の瞬間
桂木くんは自嘲気味に
鼻で笑うと

「美心ちゃんが
人魚水球クラブに

入れたのは
外見が可愛らしい
男の子みたいだった
からさ
本来は
少年専用の
水球クラブ
だったからね」

「…でも…あたし…」

「そうだよね」

やはりあたしの
言葉を遮るように
桂木くんは頷きながら
そう言うと　続ける

「美心ちゃんは一度も
後片付けを
していない
美心ちゃんが
名指しされるたびに
健太が何かに理由を
つけて
代わってやって
いたからね…
『美心は今日

体調が悪いから
俺が代わりに
後片付けやります』
とか

『み～ちゃんは今日
早く帰らないと
いけないから
俺が代わりに
後片付けやります』
とかね…」

…健ちゃんが
身代わりとして
あたしのことを
守ってくれて　いた？

…健ちゃん
そうだったの？
…健ちゃん
本当に？

どうしてだろう…
変なの
こんなときくらい
爽やかな笑顔の

健ちゃんの顔を
思い出したいのに
浮かんでくるのは
不貞腐れた顔や
そっぽを向いてる
ときの
健ちゃんばかり…

あたしは
居た堪れなくなって
声を絞り出すように

「…ねぇ　どうして？
どうして誰にも…
言わなかったの…？」

そう桂木くんに
問い掛けた

桂木くんは
そんなあたしの問いに
小さく首を振ると

「…言いたくても
言えなかったんだよ
風間コーチは
あの倉庫の中に
隠しカメラを

仕掛けていて
その行為の
一部始終を
記録していたから…

それに
風間コーチは
他のコーチや
保護者からも
とても人気があって
信頼もされていた
からね…
誰もそんなことを
疑うことすら
しなかったよね…

…だから
だから僕達は
我慢するしか…
なかったんだ…」

…どう言葉をかけて
いいのか…

そして
あたしの身代わりに

なってくれていた
健ちゃんのことを
思うと

あたしはどうすれば
いいのか…

…分からない

そんなあたしを
見つめながら
桂木くんは

「…本当はずっと
誰かに
話したかったんだ…
すべてを話すことで
少し
楽になれるような
気がして…
そう簡単に
全部が終わったこと
とは
割り切れないけど…

健太がずっと

言ってくれて
いたから…
『いつかみんなで
あいつを地獄に
突き落として
やろうぜ』
…って
『潜っているときに
みんなで抑え
込めば
あいつの息の根を
止められるから』
…って

そのことを
考えるだけで
色々と頑張れた…
その日が来るのを
楽しみに
待つことが
出来たから…

それなのに僕は
そんな大事な日に
健太達と一緒にいる
ことが
出来なかった…
一人だけ

健太達を
裏切ったんだ…」

そう言って
俯いた

「桂木くん…」

今のあたしには
名前を呼ぶことが
精一杯だった…

「…美心ちゃん
刑事である
お父さんに話す？
健太に
僕達全員に
風間コーチを殺す
動機があったという
ことを…

そしてそれを
水球クラブの
OBとして
コーチ補助として
実行することが
出来た
ということも…」

あたしは小さく
首を振ってから

「…心配しないで
約束したもの
…勇気を出して
話してくれて
本当に
…ありがとう」

そう言ってから
無理に
微笑んで見せた

10．プリンと彼女

桂木くんが帰った後
あたしは
当初の目的通り
冷蔵庫から
取って置きのプリンを
取り出して

リビングの椅子に
一人座って
それをモクモクと
まるで機械が
何かの作業を
するみたいに
スプーンを
動かしながら
食べて　いた

小学校五年生
　　六年生の
二年間ずっと
人魚水球クラブに
通っていた
あたしのことを
風間コーチから
守ってくれていた

健ちゃん…

そして
あたし以外の
健ちゃんを含めた
男の子達全員が
風間コーチから
受けていた
残酷な事実…

そのことを思うと
胸の辺りが痛くなる
…ううん
張り裂けそうに　なる

それでも…
風間コーチの
日に焼けた
爽やかな笑顔を
思い浮かべる度に
どこかでそのことを
信じ切れない
あたしもいる

でも…
桂木くんは

嘘を付くような
人間じゃない
仮に
嘘だったとしても
こんなことを話して
一体誰の
得になるのだろう…

“…言いたくても
言えなかったんだよ
風間コーチは
あの倉庫の中に
隠しカメラを
仕掛けていて
その行為の
一部始終を
記録していた
から…”

ふいに
桂木くんの言葉が
頭の片隅に
甦る

“行為の一部始終を
記録…？”

…じゃあ
その記録していた
モノは
今　どこにあるの？

プリンをすくっていた
スプーンの動きが
あたしの手が…
止まる

そして突然
ある人の言葉が
脳裏に
浮かび上がって来る…

“美心ちゃんとは
たった二人の
女の子同士だもの
仲良くしようね”

…どうして今
三枝コーチのことを
思い出す…の？

“男の子達には内緒ね

実は私
風間コーチと
付き合ってるの”

あたしはハッとして

…どうして今まで
思い出さなかったの
だろう

…そうだ
風間コーチの彼女の
三枝コーチなら
もっと色々なことを
その…
記録したモノの
ことも含めて
何か知っているかも
しれない

…でも
この二年間で
二人が別れている
可能性は？

それでも…
ここでこうして
何もしないで
悩んでいるよりは
全然いい

あたしは
容器の片隅に
残っているプリンの
欠片を
スプーンも使わずに
口の中に
放り込むと

急いで
自分の部屋へと向かい
机の引き出しの中から
人魚水球クラブの
メンバー住所録一覧を
取り出す

「…あった！」

あたしは
そう口に出して
その中から
三枝コーチの住所を

確認(かくにん)すると
メモに書(か)き移(うつ)し

そのメモを握(にぎ)りしめ
手短(てみじか)に
外出(がいしゅつ)の準備(じゅんび)を
済(す)ませると
家(いえ)から　飛(と)び出(だ)した

11．マンションの前で

“○○町3丁目
108番地
グランドハイツ
ホワイト
202号”

掌に握りしめた
三枝コーチの
住所が書かれている
メモを
ポケットに
しまい込むと

あたしは目の前に
そびえ立つ
その名前の通り
真っ白な
マンションを
見上げていた

あたしの家から
数十分の距離
案外　近かったんだ…

あたしは掌で
軽く両頬を
ピシャッと叩くと

「よし！」

そう声に出してから
三枝コーチの住む
マンションの中へと
一歩を踏み出した

自動扉が開いて
もう一枚の扉は
オートロック

あたしは近くにあった
呼び出し機で
三枝コーチの
部屋のナンバーを
押すと
応答を　待った

…どうしてか
分からないけれど
とても胸が
ドキドキする

呼び出し音を
聞きながら
あたしは何故だか
左手で
胸の辺りを
押さえて　いた

勢いで
家を飛び出して来た
のは
いいものの
よくよく考えてみれば
三枝コーチに
どういう風に
話していいのか
分からない…

ただでさえ
彼氏である
風間コーチの
突然の死を
悲しんで
いるはずなのに…

そこに
風間コーチの

隠された秘密を
聞き込もうとしている
あたしが　いる

…もし
三枝コーチが
そのことを
知らなかったと
したら…？

ただ単に
三枝コーチを
傷つけることに
なるだけなのでは…？

でも
あたしは…
本当のことが
知りたいんだ…

それでも
そのことに
三枝コーチを
巻き込んでしまっても
いいものなのだろう
か…？

三枝コーチに
会いに来たことを
安易に
呼び出しボタンを
押してしまったことを

あたしが少し
後悔し始めた頃…

「…はい
どちら様…
あら！？
美心ちゃん？
美心ちゃんなの？」

三枝コーチの
明るい声が
呼び出し機の
スピーカーのような
マイク部分から
聞こえて　来た

あれ…
あたしの姿
見えてるんだ

ふと
よく見れば
呼び出し機には
覗き穴のような
小型のカメラが
付いているのが
分かる

ああ…
それで…
あたしの姿が
見えてるのね
…なんて納得してる
場合じゃなくて…

…でもせっかく
ここまで
来たんだもの…
会って
話していくだけでも
いいよね…

そう自分に
言い聞かせてから
あたしは急いで

そのマイク部分に顔を
近づけると

「こんにちは
お久しぶりです
こんなときに突然
すみません」

そう言って
カメラに向かって
小さく会釈を　した

12．再会

「久しぶりね～！
あらあら
すっかり
女の子らしくなって
さぁ　入って
入って～」

オートロックの扉を
抜けて
エレベーターを
降りた先

2階の2号室
プレートに
“202”と書かれた
その扉の横の
チャイムを
押そうとした瞬間に
三枝コーチは
扉を開いて

2年前と変わらない
優しいその笑顔で
あたしを出迎えて

くれた

「…あれ？
三枝コーチ
その格好…」

喪服姿の
三枝コーチを
見つめながら
尋ねるように
あたしが言うと

「…うん
こんな格好で
ごめんね～
今　丁度
良介の…
あっ…風間コーチの
お葬式から
帰って来たところ
なのよ～」

“良介”
風間コーチの
下の名前だ

そっか…
知らなかったけど
三枝コーチは普段
風間コーチのことを
“良介”って
呼んでたんだ…

一瞬
変なことに
感心している　あたし

「さぁ
ともかく
入って入って〜」

玄関先にいたあたしを
再び促すように
三枝コーチは言う

「失礼します」

あたしは
そう言って
靴を脱ぐと
それを揃えてから
部屋の中に
お邪魔する

…白を基調とした
可愛くて
清潔感のあるお部屋

マンションの名前も
ホワイトだったし
三枝コーチって
白色が好きなのかな？

あたしは勧められた
白くて丸い
ビーズクッションに
腰掛けながら
そんな部屋の中を
キョロキョロと
見回して　いた

三枝コーチは
喪服姿のまま
キッチンで
ゴソゴソと
何かをしていたかと
思うと

白いお盆に
クッキーと
アイスティーを載せて
あたしのところまで
やって来た

「外は暑かったで
しょう？
水分補給と
エネルギー補給を
してね～」

そう言って
クッキーと
アイスティーを
あたしに差し出す

何となく
その言い方が
スポーツ選手らしくて
あたしはクスッと
笑ってしまう

「あら？…私
何かおかしなこと
言った～？」

三枝コーチは
少し首を傾げながら
あたしを見つめる

あたしは慌てて

「あっ…いえ
何だか
三枝コーチ
昔と変わって
ないなぁ…
って思ったら
つい嬉しく
なっちゃって…」

そんなあたしの言葉に
三枝コーチは　一瞬
考え込むように
腕を組みながら

「まぁ…
私はね…
でも美心ちゃんは
水球を
教えていた頃は
とても
男の子っぽかった

けど
今はとても
女の子っぽく
なったわよ〜

…私　びっくり
しちゃって…
でも　まぁ…
私の大人の魅力には
まだまだ遠く
及ばないけどね〜」
そう悪戯っぽく言う

あたしはすかさず

「でもあたし
シャワーの水
まだ肌が
弾き返しますけど…」

そう言うと

「な…何ですって…
シャワーの水を…
肌が…弾き…
返すですって〜！

私なんて
吸い込むばかり
なのに〜？」
と三枝コーチが
言い返す

…そして
一瞬の間があってから
二人して
声を出して　笑った

あたしは三枝コーチと
一緒に笑いながら
気持ちが
ホッとしているのを
感じていた

勢いだけで
三枝コーチの
マンションへ
やって来てしまった
けれど

このまま
こうやって

楽しい会話だけをして
帰ったって
別に　いい

“…本当のことが
知りたい…”

弱気になった心から
強い気持ちが
消えそうになって
笑う三枝コーチを
見つめながら

あたしは
そんなことを
考えていた

13．訪問理由

…そう
このまま
三枝コーチと
楽しく会話をして
家に帰ったら　いい…

これ以上
あたしが
首を突っ込むことじゃ
ないし…

風間コーチは
事故死だと
刑事であるお父さんが
警察が
判断したことなんだ
し…

水球クラブの
男の子達を
撮影記録した
モノだって
本当にあるのかどうか
分からないんだし…

…もしそれが
本当にあったとしても
このまま
見つからなければ
もう何も
問題はないことなんだ
し…

…何だか
自分に言い訳を
してるみたい…

あたしはフッと
笑うのをやめて
そんなことを
少し俯いて
考えて　いた

「…美心ちゃん？
どうしたの？
突然　真顔になって」

顔を上げれば
そこには

心配そうな
三枝コーチの顔…

「あっ…いえ
すみません
ちょっと考え事を
しちゃって…」

あたしがそう応えると
三枝コーチは
優しく微笑みながら

「…ひょっとして
健太くんのこと？」

そう言う

「…えっ？
いえ　全然違います
何であんなののこと
なんか！」

顔が火照るが
自分でも分かる

三枝コーチは
テレビのクイズ番組に
正解したような
顔つきになって

「そうだと思った
のよ〜！
…で　付き合って
るの？」

そう言いながら
キラキラとした瞳で
あたしを見つめる

三枝コーチ…
人の話を
全然
聞いて　ない…

あたしは思わず
「違います！
健ちゃんは全然
関係なくて…
ううん…
関係ないことも
ないけれど…

風間コーチのことで
…そう！
風間コーチのことで
三枝コーチに
聞きたいことが
あって
それで…
それでここに
来たんです！」

大声で
そう言ってしまって
から
あたしはハッとして
三枝コーチの顔を
見つめ直した

三枝コーチは
そんなあたしの目を
真っ直ぐに
見つめ返しながら

「…そう
ここに来た理由は
そういうことだった

の～」

そう言って
何ともいえない顔で
微笑んだ

「いえ…その…
風間コーチのことで
彼女である
三枝コーチなら
何か知っているかな
…と思って…」

あたしは
しどろもどろに
なりながら
そう応える

「…別にいいのよ！
本当のことを言って
くれたほうが
私も嬉しい～」

そう言いながら
三枝コーチは微笑むと
続ける

「美心ちゃんが
水球クラブを
卒業してから
ずっと会って
いなかったから…

突然　訪ねて
来たからには
今回の良介の
あっ…風間コーチの
事故死のことと
何か関係があるの
かもしれないとは
思っていたから
全然大丈夫よ〜

…で　何が
聞きたいのかしら？
私で応えられる
ことなら
いいのだけれど…」

そう言って
三枝コーチは
やっぱり微笑む

…ちょっと難しい
…ううん
かなり難しい

…何を
…どういう風に聞けば
いいんだろう…

あたしは
いつの間にか
あのときの…
何も考えずに
家を飛び出して来て
しまったあのときの
気持ちに戻って

…そう
“本当のことが
知りたい”
そんな気持ちに
戻って

…素直に
聞くしかない…

正直に
あたしの
聞きたいことを…

例えそれが
三枝コーチを
傷つけたとしても…

あたしはそう
心に決めて
小さく息を吸い込むと
静かに口を　開いた

１４．後片付けの記録

「…後片付けの
…こと…です」

あたしがそう
口を開いた瞬間に
三枝コーチの微笑みは
誰が見ても
分かるほどに
強張った

…チク
……タク
……チク
……タク

どこかに置いて
あるのだろうか？
妙に大きく
時計の針の音だけが
二人の間に
流れる…

…三枝コーチ
知ってたんだ…

…後片付け
そして…
倉庫の中で
行われていたことを…

何となく
時計の針の音を
数えながら

あたしはじっと
三枝コーチが
口を開くのを
待って いた

そして
時計の
針の音の数が
六十を超えた
丁度そのとき

フゥッ〜と
小さく
息を吐き出す音がして
三枝コーチは

あたしから
目を逸らすと

ベランダへと続く
ガラス張りの扉から
外の景色を眺めながら
言葉を紡ぎ始めた

「…私と良介はね
幼なじみだったのよ
小学校　中学校
高校…

そして…
大学までも
ずっと一緒で
腐れ縁なのかしらね

水球もね
私は特別
興味があった訳じゃ
なかったんだけれど
良介がするって
言うから
ただ単に
ついて行っただけ…」

三枝コーチは
そう言って
立ち上がると
部屋の隅にある
クローゼットへと
向かう

そしてそこで
何かを探しながら
続ける

「…そんな良介に
あんな性癖が
あっただなんてね…
人魚水球クラブで
コーチを引き受ける
まで
全然
気がつかなかったわ

…どうりでずっと
彼女と言っても
幼なじみを
卒業出来ずに
友達以上
恋人未満のままな
関係な訳よね〜」

三枝コーチは
クローゼットの中から
白色の
大きなエコバックを
取り出すと

それをあたしの前に
持って来て
ドサッ…と置く

「…気がついたのは
水球クラブで
コーチをし始めて
1年後くらいだった
かしら
良介の部屋で
良介の
ノートパソコンを
触っているときに
偶然ファイルを
見つけたのよ…」

エコバックの中から
小さなビデオカメラを
一つ取り出して

三枝コーチは
やはりあたしの前に
それを置きながら言う

「…もちろん
誰にも開けない
ように
暗号付きには
なっていたけれど
そこは名ばかりの
彼女でも
ずっと一緒にいた
幼なじみなんだもの
良介が思いつく
暗号なんて
すぐに分かったわ～」

三枝コーチが
そう言い終わって
エコバックを
逆さにして振ると

…その中から
もの凄い数の
USBメモリが
絨毯の敷いてある
床の上に…

あたしの目の前に
溢れ出て　来た…

15．真相

山積みになった
USBメモリと
小さな
ビデオカメラ一つを
前にして

あたしは
ただただ呆然と
それらを
見つめ続けて　いた

…こんなにたくさんの
記録…

この一つ一つの
USBメモリの中に
人魚水球クラブの
男の子達全員の…

桂木くんの
健ちゃんの
苦しみと悲しみと
憎しみが

収められて　いる…

あたしは
やり切れない
想いと共に…

…そんな中
妙に
落ち着き払った声で
淡々と
一人話し続ける
三枝コーチの声を
黙って
聴いて　いた

「…それでね
良介が死んだ日の夜
この記録したモノを
ビデオカメラを
良介の部屋から全部
持って来たのよ〜
もちろん
ノートパソコンの
中身も全部
削除しておいたわ〜

どうして
そんなことを
したのか…
と言うとね…」

三枝コーチは
ここで一度
言葉を切ってから

「…私も
人魚水球クラブの
生徒達全員と
ある意味
同罪だから…なのよ」

そう淀みなく
澄んだ声で
はっきりと言った

あたしはその言葉に
ハッとして
三枝コーチを
驚きながら見つめると

三枝コーチは
寂しげに微笑んで

「昨日のことなのに…
もうずっと
昔のことみたい…
徳川コーチは丁度
お休みで…
私と良介と
健太くんと
数人のOB達が
生徒の指導に
あたっていたのよ…

そのうち健太くんが
『タイル拾いゲーム
やりましょう
ただの個人戦じゃ
つまらないから
風間コーチ
VS
生徒全員で
どうすっか？』
なんて言い出して…

…地味に
タイル拾いゲームは
盛り上がるわよね～
今考えれば
良介もバカよね…

『よ〜し！
受けて立ってやる
ぞ〜！』
なんて言いながら
爽やかに
笑ってたわ…」

そう言って
三枝コーチは
あたしから
視線を外すと

まるでその瞬間を
思い出すかのように
どこか空を
遠くを見つめながら
続ける

「私は審判役で…
…プールの中に
ばら撒かれた
色付きの
タイルを見て
張り切る良介と
どこか対照的な
生徒達に向かって
スタートの合図の

笛を吹いたのよ…

…もちろん
一番最初に
飛び込んだのは
良介だったわ…」

…甲高く響く
笛の音
そしてプールに次々と
飛び込んで行く
水しぶきの音…

あたしにも
その瞬間が
見えてくるようだ…

「おかしいな…
と思ったのは
生徒達全員が
笛の音から
ワンテンポ遅れて
みんなで
目配せをしながら
先に潜っている
良介の上に

覆い被さるように
順番に
潜って行ったこと…

…そして
一番最初に
水面から浮かび
上がって来た
健太くんの顔を
…その瞳を
見た　瞬間…」

三枝コーチは
その瞬間の
健ちゃんの瞳を
思い出したのだろうか？
そっと　2～3秒
目を閉じて
そして再びゆっくりと
開いた

…風間コーチを
プールの底で
生徒全員で
覆い被さるように
抑えつけて…

いくら大人の
水球選手でも
真っ直ぐ水平に
潜っているところを
十人前後の子供達に
覆い被さられるように
抑えつけられたり
したら…

そしてそれを
先頭に立って
行ったのが…
健ちゃん…

だから健ちゃんが
一番最初に
プールから顔を
出した…

…健ちゃん
どんな気持ちだったの？
一体…どんな…？

あたしのその疑問に
まるで応えるように

「…とても
満足そうな…
…そう
何とも言えない…
今まで見たことも
ないような顔で
微笑んだの…よ

まるで大きな何かを
成し遂げた後
みたいに…
そして…
不審そうに
見つめている私に
気がついて
目と目が合うと…

もう一度
ゆっくり
同じ顔で
瞳で
微笑んだ…の」

三枝コーチは
静かにそう言ってから

「でも私…
思ったのよ〜
良介は
自らの業から
逃れ切れずに
人魚達から
復讐をされて
そして永遠に…」

三枝コーチは
ここで一瞬
言葉を切ると
そのまま続けて

「私のモノに
なったんだから…
それでいいって…ね」

そう言うと
怖いくらいに
あたしを真っ直ぐに
見た

16．もう一つの幼なじみ

…あたしのことを
真っ直ぐに
見つめている
三枝コーチの
瞳の奥に
あるもの…

あたしはそれを
探し出すように
見つけ出すように

そっと…
唇から発した言葉は
自分でも
意外なものだった

「…あたし
何となく
三枝コーチの
気持ちが
分かるような
気がします…」

あたしがそう
言葉を発した瞬間
三枝コーチの瞳から
大きな涙の粒が
溢れ落ちた

あたしはポケットから
花柄のハンカチを
取り出すと
三枝コーチに差し出す

「…ありが…とう…」

三枝コーチは
そう言って
あたしからハンカチを
受け取ると
それを両頬に
充てがった

風間コーチと
三枝コーチの関係は
…どこか
健ちゃんと
あたしの関係に
似ている…

なぜか腐れ縁で
小さい頃から
ずっと一緒の
幼なじみ…

いつも隣にいるのが
当たり前で…
でも…
友達以上
恋人未満…

その大切な
幼なじみが
自分とは
全く違う世界にいると
知ったとき…

そして…
その世界から
逃れ切れず…
でもそのことで
他の誰かを苦しめ
悩ませ
悲しませている
ということを
知ったとき…

三枝コーチは
選んだんだ

風間コーチを
大切な幼なじみを
自分の心の中だけで
キレイに
生き続けさせる
という方法を…

…ふいに
健ちゃんの真剣な顔が
脳裏を　横切る…

もしあたしが
三枝コーチと
同じ立場に
なったとしたら…

…あたしも
三枝コーチと
同じ事を
したのだろうか…？

「…でも…私
罪を…犯したのよ…」
溢れ出る涙を
ハンカチで
押さえながら
三枝コーチは
弱々しく
そう言って
続ける

「…あのとき
おかしいな？
…と思ったあのとき
私がゲームを
中断していれば…

…でも
私はそれを
しなかった…

それに…私…
美心ちゃんの
お父さんに
事故のときの様子を
聞かれたときに

良介の体調が
あまり良くなかった
…なんて
嘘まで付いたわ…」

あたしは慌てて

「でもそれは…
健ちゃん達を
水球クラブの
生徒達を
守るための
嘘ですよね…
それなら…」

“…それならきっと
仕方が…ない…”

あたしが
そう言おうとしたのを
三枝コーチは
遮るように

「いいえ…
それは違うわ…
私は良介を
良介をただ単に

…永遠に
自分だけものに
したかった　だけ…

…そして
その最期も
大好きだった
水球の…
…プールの中で
殺人ではなくて
事故死として
迎えさせることが
出来そうな
このチャンスに
賭けてみただけ…」

そう言って
三枝コーチは
視線を
絨毯の上に
ばら撒かれた
USBメモリに
向けると

「このおぞましい
撮影記録を…
水球クラブの

男の子達全員を
苦しめ続けた
この撮影記録を…

…どうして
良介の部屋から
私の部屋に
持って来たと思う…？」

あたしは無言で
小さく首を振る

三枝コーチは
寂しげな顔で
そんなあたしを
見つめると

「私と
水球クラブの
男の子達以外には…
誰にも真実を
知られないように

…素敵な
爽やかな
イメージのままの

“風間良介”で
いさせて
あげたかったから
なのよ…」

三枝コーチは
そう言ってから

ハンカチでは
拭い切れない
涙に濡れた
顔のままで
どこか満足そうに
微笑んだ…

17．秘密の受容

…

……

……一週間

風間コーチが
亡くなってから
一週間が経っていた…

当初
お父さんが
指摘した通り

その後　特に
何の問題もなく
風間コーチの
その死は

不運な
プール内での事故死
ということで
片付けられ

誰も
その話題には
触れなくなって　いた

人魚水球クラブは
主催者の徳川コーチが
解散を発表し

誰もそれを
引き止めることなく
ひっそりと
その歴史に
幕を閉じた

あたしはと言えば
中学生になってから
初めての
夏休みの続きを
再び満喫するように

自分の部屋の
ベッドの上に
横になっては
相も変わらず
ゴロゴロとしていた

…夏休みに入ってから
すぐに起きた
あたしが
小学生の
高学年のときに
通っていた
人魚水球クラブの
コーチの一人である
風間コーチの
突然の死…

あたしは何だか
探偵気取りで

小学生のときに
同じくその
水球クラブに
通っていて

中一の今は
OB兼コーチ補助
として
そこに通っていた
幼なじみの健ちゃんに
連絡を取り

風間コーチの
死について
色々と
話しを聞いている内に

健ちゃんがあたしに
何かを隠している
ということに
気がついて
不安な気持ちに
なったりも　した…

それから
水球クラブのOBで
同学年の
桂木修平くんが
突然あたしの家に
やって来て

健ちゃんがあたしに
隠していた
衝撃的な
事実を聞き出し
それを知ることに
なった…

あたしは
居ても立っても
いられなくなって

風間コーチの
彼女である
水球クラブの
コーチの一人である
三枝コーチの
マンションを訪ね
そこで
その全真相を知った…

あたしはゴロンッ…と
ベッドの上で
大の字になると
部屋の天井を
見つめる…

…誰にだって
…そう誰にだって
人に言えない秘密の
一つや二つを
持っている　はず…

もし自分の大切な人が
大好きな人が…

少年愛者だったら…？
少女愛者だったら…？

SM愛好家だったら…？
同性愛者だったら…？

ある犯罪の
加害者だったら…？
被害者だったら…？

それとも
もっと別な…

あたしの
想像もつかない
とてつもない
“何か”
…だったとしたら…？

あたしはそれを
受け容れることが

出来るだろうか…？

そのことを知っても
愛し続けることが
出来るだろうか…？

…そんなことを
ボッ～としながら
考えていると…

クゥ～と
お腹の虫が声を上げる

…うん
考えると
脳の糖質を使うから
お腹が空くよね…

どんなに真剣に
色々なことを
考えていても
やっぱりそこは
中一の女の子
空腹に勝るものなんて
絶対に　ない

あたしは
冷蔵庫の中にある
取って置きの
モンブランケーキの
ことを
思い出して

少しウキウキしながら
ベッドから
飛び起きると
二階の自分の部屋から
階下のリビングへと
向かう…

…あたしは
刑事であるお父さんに
この一連の物語を
何一つ
話さなかった

刑事の娘としても
ひょっとしたら
一人の人間としても
あたしの判断は
間違っているのかも

しれない

…でも
それでも…
あたしは…

…そのとき
“ピンポ〜ン”
玄関のチャイムが鳴る

階段を降りかけていた
あたしは

「は〜い」
と返事をしながら

急いで階段を降りて
玄関へと向かい
鍵を開けると
ゆっくりと
扉を　開いた…

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0716x/

人魚たちの復讐

2011年11月4日16時19分発行